

こもれび通信 前期号

児童発達支援センター あすなろ学園 発行責任者：島崎利行

「4か月が経ち…」

事務局長 町田 正義

あすなろ学園の新年度の通園は、15名の入園児を迎え、40名で満開の桜に祝福され行われた開始の会でスタートしました。新年度のクラス名はみんなが大好きなお菓子の名前で、わたあめ、まかろん、くっきー、くれーぶです。

4月に就任した私も、新鮮な気持ちで日々、子ども達と関わらせていただいています。大人でも新しい環境に慣れることは大変ですが、子ども達は楽しそうに、毎日園庭や教室を駆けまわり、元気に過ごしています。6月の親子で遊ぼう集会では、晴天に恵まれ、お父さんとお母さんたちと一緒に元気いっぱい、たっぴりと遊んで参加された全員の笑顔が弾けていました。これからもご家族とともに子ども達の成長を支え、見守っていきたいと思います。

そして、あすなろ学園では、通園事業とともに地域支援事業に力を入れています。発達相談、障害児相談支援、カンガルー通園、保育所等訪問支援や巡回相談等、関係機関と連携を図りながら展開しています。子どもの発達や子育ての悩みなど保護者の相談を始め、保育園、幼稚園などへの訪問を通して、先生や保健師の方々と共に支援を行っています。

施設や人員等に限りはありますが、戸田、蕨、両市の地域の児童発達支援センターとして、職員一同さらに努めてまいりますので、ご家族や関係者の皆様には、今後ともご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

「親子通園開始のきっかけ」

施設長 島崎 利行

親子通園開始の歴史は、昭和55年に遡ります。開設から2年後のことです。30周年記念誌には「重複障害児(当時の「ひまわり組」)の発達の特性上、日常生活全般の関わりは、施設だけの取り組みは、意味をなさないため、保護者と理解、協力し、同一方法で取り組む事が、子どもの生活を豊かにすると考え、母子通園(当時の名称)が可能な保護者に協力を求めた」とあります。

最初は、数名の保護者の自主的な通園として開始。前園長からも、当時の様子を語り聞いています。親に全介助されていたAくんの給食、手を使って食べる力があると職員は見立て、うどんを手にもきつけ食べる方法を学園で実践、その方法を家庭でも一貫してやってもらい手で食べるという自立の力の獲得につながったそうです。

その意義をふまえ昭和57年に全クラスに導入されました。子どもの小さな成長を願って開始された親子通園。子育ては、「子ども中心に学園と家庭がつながり、保護者と支援者が理解しあって、保護者仲間など様々な人に支えられチームでやるもの」という理念が、親子通園に具体化されていたと思います。

～親子の関わり合いについて考えよう～

あすなる学園では、月4回の親子通園、行事の開催、地域体験など、コロナ禍前の日常に戻りつつあります。特に親子通園では、我が子との遊び合いを通して“こんなことができるんだ！”と新たな一面を発見したり、普段自宅ではできない遊びと一緒に体験したりと、通園を通して親子で触れ合う機会が増えていることを嬉しく思います。

そこで、今回のこもれび通信では、【親子での関わり合いについて】をテーマにしました。通園を通して大切にしていることや感じたことなどについての思いを、在園児保護者、カンガルー通園児保護者から綴って頂きました。今学園に通われている保護者の皆様にも、共感できること、参考になることもあるかと思えます。ぜひ、ご家族で読んでいただければと思います。

在園児保護者より

Hさん

あすなる学園に毎日通うようになり2年目ですが、親子通園はとても楽しいです。

我が子が、上手にお遊戯しているのを見て驚いたり、お友達に絵本を取られたりしているのを見られるからです。同じクラスの子供たちも、元気で様々な個性があり、みんなに会えるのも楽しみです。

難しいことは、お昼の時間。いまは大丈夫ですが、つい数ヶ月前まで、子供が私と離れると号泣していました。やっと慣れてくれたのか、最近は泣かないですが、辛そうな顔をしているときもあり、お昼の時間以外に何処か行こうとすると止められます。

久しぶりに親子通園に行くと、それまでやっていなかった、ハードな遊びをしていたり驚きますが、そういう遊びが出来るようになったのは、先生とお友達のおかげだなと思います。

これからも、先生とお友達と仲良く楽しく過ごせたらと思います。

ありがとうございました。

Sさん

親子通園での最大の学びは、短い時間でも子どもと一緒に遊び笑い合う事で親子の絆は強くなる、という事です。正直、私は子どもとの関わりが得意ではなく、どう遊べばいいのか…と悩むタイプ。息子もひとり遊び大好きな、自由人タイプ。そんな親子なので、我が子に関心はあるものの、信頼関係は築けているのか？というモヤモヤがずっとありました。

そんなこんなで迎えた入園初日、私の目に飛び込んできた学園のスローガン。『いっしょにあそぼう! いっぱいわらおう!』「…あ、これだ。」と腹落ちしました。一番大事な事は、どう遊ぶかではなく、“一緒に遊んで、いっぱい笑い合う”。これだけは親子通園の時間だけでも意識して息子と向き合おう。そうやって過ごすうちに、シャイな息子に甘え上手な一面が。以前よりも大人への期待感も強くなり、一緒にやりとりしながら遊べる場面も増えました。

まだまだ伸びしろしかない親子ですが、共にゆっくり成長していければと思います。

Yさん

先日の親子通園でのことです。その日は机上遊びの時間に型抜きパズルをやりました。麻痺があり手を上手く使うことの出来ない娘に、私はこれまで先回りして手助けをすることが多かったように思います。その日は手を出したい気持ちをグッと堪えて、一つのパズルごとに何十秒もかけ、指で少しずつ向きや位置を調整しながら型にはめる娘の様子を見守りました。一つ型にはめるごとに「はぁ～」とため息をつきながら進めていく娘の様子に少々笑いながらも、完成して満足そうな顔、先生に「すごいね！」と褒められて嬉しそうに笑う姿にこちらも嬉しくなりました。出来ないだろうと決めつけて、娘の「一人で出来た！」という達成感を、これまで奪っていたのかもしれないかもしれません。麻痺があってもこれから自分で出来ることは少しずつ増えていくことと思います。娘の挑戦する気持ちや達成感を大切に、出来たときは一緒に思い切り喜ぶことが娘の成長につながるのかもしれないと感じることが出来た親子通園でした。

Uさん

我が家では、仕事の都合がついた時には、父が親子通園に参加しています。兄弟とも、カンガルー通園からお世話になっていますが、親子通園に参加するたびに、様々な場面で我が子の成長や頑張りを肌で感じています。

先日の親子通園でも、我が子との関わり合いの中で、多くの気づきがありました。身支度する前に部屋の中を駆け回ったり、朝の会の途中で立ち上がると、先生の後ろから読み聞かせの絵本を覗き込むなど、奔放で自由人な一面が垣間見えることもありました。一方で、のりを丁寧に塗って花紙でたんぽぽを制作したり、家では食べたことのない赤魚を頬張ったり、帰りの会で率先して歌を歌い、元気に「サヨウナラ！」をしたりと、笑顔の我が子と「できた！」の喜びをたくさん分かち合えました。

これからも我が子の「ミテ！」「スゴイ！」を大切にしつつ、「ノー！」「ヤダ！」という気持ちに寄り添いながら、一步踏み出すきっかけを一緒に探していきたいです。+

カンガルー通園児より

Kさん

息子は言葉の遅れや身体に動かしづらさがあります。そんな息子の成長につながる関わり方がわからず、こちらに参加させて頂く事になりました。

教室では回を重ねるごとに1つ1つの活動にのびのびと参加できるようになり、興味や発達にあった遊びの大切さを改めて感じました。

また、他のお友達がいる事も嬉しいようで、お友達の姿をよく見て自分も真似して挑戦しようとしたりなど、とても良い刺激になっている様です。

今はまた新たな成長段階に試行錯誤の毎日ですが、先生方はいつも落ち着いて向き合って下さり、“息子が今どうしてこの様な行動をとったのか、それに対してどうしてあげたらいいのか”を一緒に考えて下さるので、家での関わりにも繋げる事ができとても勉強になります。

今後も“息子の表情をよく見ながら、息子のペースで”を忘れずに。親子共々楽しみながら一緒に成長していきたいと思います。

Eさん

最初は場所見知り与人見知りで、常に私がそばにいないと不安になってしまうこともありましたが、回数を重ねるごとに少しずつですが私から離れておもちゃや遊具等で遊ぶことが出来ました。特に音楽や身体を動かすのが好きな子なので、毎回カンガルー教室のふれあい遊びをととても楽しそうにしています。

先生方はいつも笑顔で娘と同じ目線に立って話しかけてくれるので、カンガルー教室は安心できる場所の一つになっていきました。先生方を見習って、自宅でも出来ないことより出来たことを笑顔でほめるよう心がけています。

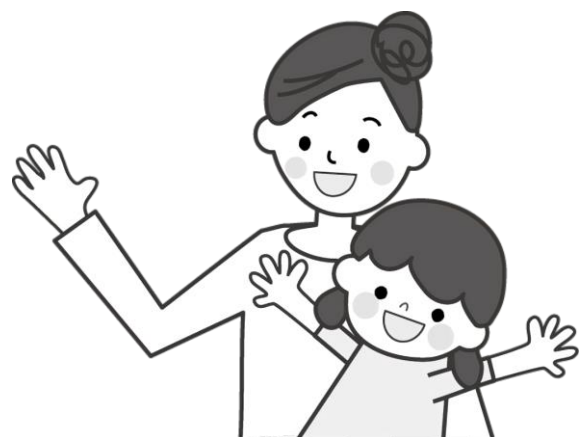
同年代の子ども達と一緒に遊んでいると、「あの子はきちんとママのお膝に座って話を聞いていてすごいな、しっかりしてるな」等、他の子と比べてしまうこともありましたが、焦らず娘のペースで良いのでゆっくりと見守って行こうと思います。

Sさん

初めてあすなろ学園を訪れた頃は、息子本人よりも母親の私の方が心配される程、子育てに行き詰まりとても辛い時期でした。

息子は独特なこだわりや癇癩が多く、外出先では常に気を張り、肩身の狭い思いをすることが多かったです。どこへ行ってもヘトヘトになり、気の休まる場所があまりありませんでした。そんな中、カンガルー教室は親子でのびのびと安心して過ごせる貴重な時間です。周りに気を遣わず、イライラもせず、穏やかな気持ちで息子に向き合うことができます。また、先生方にその時々で悩んでいることを相談できますし、他の親子とも一緒に活動できることが嬉しいです。何より息子が毎回楽しそうに参加してくれるので、母親として幸せに感じます。今ではカンガルー教室は、私にとってモリフレッシュできる時間になっています。今後は、同じ悩みを共有できる保護者同士の繋がりをもっと広げていきたいです。

そして、ありのままの息子を理解してくれる人を増やし、過ごしやすい環境を整えていきたいと思っています。



～親子通園を振り返って、思うこと～

退園した方は、親子通園をどのように感じながら過ごされていたのでしょうか。今回は、代表して3名の方に当時を振り返っていただき、今通園されている方へのメッセージも込めて綴っていただきました。

Nさん

親子通園、当時を振り返ると疲れたけど楽しかったな～と退園児の保護者はみんなそう思うのではないのでしょうか。先生や保護者との会話を通じてストレスを発散しつつ、一日娘と向き合って遊ぶ時間は、とても貴重でした。些細な事でも、「こんなことができました!」「あんなことができました!」と毎回嬉しそうに教えてくれたり見せてくれたりした先生達。親はできない事に目が行きがちですが、できないことよりもできることをたくさん見つけて沢山褒める姿勢は、3年間通ったあすなろ学園で学びました。娘が在園していた時はコロナ禍真っ最中で、親子通園やお出掛け、行事などにいろいろな規制があり残念だったので、少しずつ緩和されてきた現在はとても羨ましいです。親子通園は私たち親子にとって、とても大切な思い出です。今在園している保護者の皆様も退園して時間が経つと、きっととても大切な親子の思い出になると思います。今は大変だと思いますが親子通園を楽しんでください!

Aさん

3年間の親子通園を振り返ると、年長時はコロナ禍で回数が少なかったとはいえ、息子と向き合えたとても濃い3年でした。全力で向き合うからこそ体力も使うし、家に帰ると正直言ってクタクタです。でも、私は親子通園が大好きでした。誰の目も気にすることなく、極力安全に配慮された環境で全力で息子と遊べるのです。私にとって、次男を預け、長男だけに目を向けられる貴重な時間でした。親子通園では私に見せない表情を先生に見せていたり、お友達を慈しむように見つめていたり、家では見られない息子の色んな顔を見ることができました。その一方で他の子を見て差を感じ焦ることがあったのも事実ですが…。親子通園中に先生方に悩みを相談したことも数知れません。先生と頻りに話せるので少しの悩みもすぐ先生に打ち明けていた気がします。一緒に考え、様々な提案をくださった先生方に感謝しております。また、お母さん方とも情報交換したり愚痴ったり、わかるわかる大変だよね!と共感しあい支えあっていたような気がします。学園で繋がったご縁で、進路は分かれても未だに交流があるお母さんも多く、今でも精神的に支えられています。今まさに親子通園で奮闘している皆様、大変かと思いますがいつか懐かしく思う時が来ますので是非楽しんで頂きたいと思います。お子さんと遊びながら関われる事はもちろん、保護者同士の繋がりが出来るのも親子通園のいいところです。就学後は残念ながら子どもの様子を見られる機会は殆どありません。息子は特別支援学校に在学中なので連絡帳で日々の様子を知ることはできますが、我が子の頑張りや笑顔を間近で見られることは年に数回です。それを思うと、学園の親子通園がどれほどに貴重な時間だったか…。今でも私たち親子にとって大切な思い出になっています。

Aさん

今思い出しても“シンドかったNo.1”は、一人で悩んでいたあの頃。障がいの知識も経験もない私にとっては、ただ『大丈夫』と自分に言い聞かせて過ごすことも多々ありました。そんな日々に終止符を打ってくれたのがあすなろ学園との出会いです。息子の成長と一緒に喜んでくれる人が増えました。同じような境遇だからこそ本音を吐き出せる母友が出来ました。こうした環境が親子ともにいいスタート地点となり、幼少期の土台作りは大成功です！その勢いもあり、成長がゆっくりで怖がりだった息子も1歩ずつ、いや数ミリずつの成長だけど確実にレベルアップしています。これから先も一人では生きていけない息子だからこそ、あすなろ学園で学んだ“甘える力”を存分に使って、たくさんの人と関わり助けられながら子育てを楽しみたいと思います。継続は力なり＝今出来ないことでもいつか実を結ぶかもしれないからこそ、やれることをやる！これが今の原動力です。



～職員として親子通園に思うこと～

担任も、「こんな親子通園にしたいな」「お母さん達とぜひ共有したい！」など、日々試行錯誤しながら親子通園に臨んでいます。そんな職員の思いや考えの一部をお伝えします。

「皆さんの悩みに寄り添って」

親子通園では、今まで保護者の皆様から様々なお話を聞いてきました。子育ての悩み、我が子の成長、家庭でのおもしろエピソード等。皆様のお話を聞いていると、担任としてどんな時も親子の“拠り所”でありたいと思います。特に多いのは悩みや迷い。子ども達と日々を過ごす中、先生という立場でも実は子ども達の対応に頭を抱えることは沢山あります。十人十色というように一人一人子どもは違い、対応もそれぞれ。同じ子でも毎日コンディションも違う。子どもとの関わり方に明確な正解がないからこそ「こういう事で困ってて…」と相談を受けた時にはっきりと“こうする”と答えられないもどかしさが私はあります。けれど、皆さんの悩みに同じ気持ちで悩めることは強みではないかと思いつつながらお話を聞かせていただいています。そして、私も保護者の皆様の子育て方法を聞くことが学びです。親子通園では、一緒に悩んで、子ども達の新たな一面を発見していきましょう！

「聞くから話すに変わった親子通園」

入職して、親子通園の多さに驚きとともに、ただただ嫌だと思ったのを今でも覚えています。いざ始めれば、自分は今お母さん達の目にどう映っているんだろうと考えるばかり。そして先輩が楽しそうに話しているのに、何を話せばいいかわからない日々。そんな中、アドバイスできなくてもいい、分からないことはお母さん達に聞いたっていいと教えてもらいました。その日から、子どもの好きな食べ物や遊び、学園と家庭での違いなどとにかく“聞く”ことを大切にしてきました。徐々に打ち解けられるようになると、今度は学園であったことを伝えたいと思うようにもなりました。小さなことでも一緒に一喜一憂できるのは、顔を見合わせて話せる親子通園のよさだなと感じます。また、他の子どもの成長を、我が子のように喜び保護者の姿にハッとさせられました。みんなで子育てするってこういうことなんだなと。あんなに嫌だと思っていた私は今、この成長を見せたい、共有したいと思うほどです。これからも、一緒に悩み考えながら保護者の方と子どもたちのより良い支援のために、考えていける親子通園の時間を大切にしていきたいと思います。

「楽しさと温かさをめざして」

親子通園では、お家では、できないダイナミック遊びや、やるには少し勇気と気合いが必要な泥んこ遊び・ペインティングなどの感触遊びを取り入れています。また親子でじっくり遊ぶ、おもちゃ遊び・机上遊び・季節の制作など、動と静を考えながら、様々な活動をわが子と一緒に楽しんでもらうことを大切にしています。「泥んこ遊びなどの感触遊びは、お家でもやりたいけど、後片付けなどを考えたらできない。子どもと、ゆっくりおもちゃで遊ぶ時間がない」という声を耳にします。だからこそ、親子通園では後片付けや仕事・家事のことは一旦忘れて、わが子と思いきり楽しむ機会になってくれたらうれしいです。

また、子どもたちを大切に想うからこそ、出てくる悩みや不安はたくさんあると思います。そんな時に、気兼ねなく他の保護者や職員と会話ができるような、温かい雰囲気の中、わが子の話はもちろん様々なお話をしながら、お父さん・お母さんと一緒に成長を見守っていきたいです。



～なつかしの親子通園～

かつてクラス担任をしていた職員にも、親子通園の思い出は盛りだくさんです。今となっては幻の活動内容もチラホラ。興味ある活動がありましたら、ぜひ担任までお申し出ください♪

「集会だよ～！全員集合～！」

“四季折々の遊びを楽しみ合おう”というねらいで、毎月、全クラスが一堂に集まり誕生会を含めた集会を行っていました（こいのぼり集会～ひな祭り集会）。活発に走り回る子から歩けない子までが一緒に、接触遊びやゲーム、制作など季節にちなんだ遊びを体験。その中で、“〇〇クラスの子達はこんなことが出来るんだ”と他クラスの親子のを知る機会になりました。また、集会の雰囲気や広い空間の中で座って待つことが苦手な子たちには試練の時間（？）。“集会嫌だなあ”と言いつつも“今日はここまで頑張ろう！”と目標を決め参加していたお母さん。毎月積み重ねていく中で、その雰囲気を受け入れ参加できるようになったり、お母さんの膝で待てるようになるなど、どの親子も集会を楽しめるように。親子の頑張りが実を結んだことを実感できた集会だったと感じます。（準備は大変でしたが、集会はいつも楽しかったです！）

「マックをたずねて三千里」

『3月に戸田市役所近くのマクドナルド（約3km）まで歩きます』の一言に、目を見開いていたお母さん達。4月は、わが子との笹目中学校1周散歩に四苦八苦し、ほぼ抱っこをしていました。そこで、月1回は親子通園で散歩をし、家庭でも家の中で手を繋いで歩いたり、自転車を使わずバス停まで歩く体験を積み重ねてきました。当日は、前の人が見えなくなっても極力抱っこをせず、「マック、ポテト、ハンバーガー」を合言葉にしながら歩いたお母さん達。汗をかきながらも50分かかってみんなでゴール！その後のポテトは、格別に美味しかったことを今でも思い出します。

時代と共に活動の内容が変わるものもありますが、手つなぎ散歩は大人の関わりを受け止める大切な活動として残り続けています。余裕のある時は、バス停から手を繋いで歩いて帰ってみるのはいかがでしょうか？

「欠かせない時間と場面」

入職5年目。はじめて歩行が難しい子どもたちの担任に。私も不安でしたが保護者はそれ以上に不安だったことと思います。そんな状況であっても親子通園の度に、未熟な私を励ますように、食事姿勢やペースト状の食材の食べさせ方、硬直した時の抱き方など個々に配慮が必要なことを丁寧に伝えていただきました。それにより子どもたちへの関わりに自信が持てるようになったことを鮮明に覚えています。30年後の私にとっても親子通園での保護者の方々のわが子への関わりやまなざしは、子どもたちへの関わりに欠かせない大切な時間と場面になっています。

「歩くこと、大好きっ子に！」

“手をつないで歩くことは、大人の関わりを受け止める初め的一步、世界は広がる”がクラスのモットーであり、合言葉でした。もうかれこれ十数年前、1年を通して、親子通園で保護者が来てくれるたびに、散歩活動をしていました。親子で手をつないで歩きだすものの、疲れてくると子どもは座り込むことも。そんな時には、その場でお母さんに抱っこをしてもらったり、歌を歌ったり、グッズに励まされながらエネルギーチャージ。親子の努力、クラスの軌跡を「〇月〇日～公園まで〇m完歩」、公園での集合写真（証明写真？）を貼り、賑やかなオリジナルお散歩マップとして教室を飾っていました。1年後、クラスみんなで何km完歩したのかな～忘れましたが。この年、家庭でも「自宅⇄バス停の毎日登園もなるべく歩こう」にも挑戦。保護者は日々の育児で大変な中、我が子と共によく頑張ってくれたな…と頭が下がる思いです。

～編集後記～

親子の関わり合いは、親子通園に限らず、毎日ずっと続くもの。だからこそ、楽しいことも悩みも弱音も、共有しながら、わが子と向き合うエネルギーにできたらと思います。原稿を寄せて頂いた皆様、本当にありがとうございました。（編集係：山本・細谷・織田）